

2011年2月26日

1980年カラコルム踏査隊事故について

中川勝八郎

隊員 中川勝八郎 神戸大学工学部大学院生 25歳
 右田 順 兵庫県小学校教諭 25歳

1976年カラコルム、シェルピカンリ峰登頂後、次の遠征の目標として、中国の山やカラコルムなどで対象の検討がなされた。当時、中国はまだ解禁されておらず、中国に関しては長い展望にたって考えることとし、カラコルムに残された世界でも数少ない未踏の山域リモを目標とした。主峰はリモ1峰7385mである。しかし、リモも当時、印パ国境に位置しており、解禁地域に入っていたなかった。また、今まで、登山隊が近づいたことは無く、登路もはっきりしない点が数多くあった。1979年秋、パキスタン観光省に1980年夏の登山申請を出してみたところ、不許可の通知が届いた。再度問い合わせをしたが、理由は述べられないとの返事があった。そこで、今後の対応策を練る為、中川、右田でパキスタンに行き、直接観光省に出向いて、許可の可能性を探るとともに、登路の偵察も行うこととした。二人にとって、海外の山は初めてであり、経験を積みたいという思いもあった。

観光省に出向いたが、責任者のアウン氏が出張で不在だったので、登路偵察を先に行うこととし、以下の日程で行動した。

7月21日 日本発 ラワルピディ到着
 25日 飛行機でスカルドに飛び、ジープを調達してカバルに入る
 26日 コック1名、ポーター4名とともにキャラバン開始。
 スルモ～ウルセ～ダンダラ～パロア～パリット～最奥の部落ゴマ～ギャリ～バチサ～ナラム
 8月 3日 ビラフォンド氷河4800mにBC設営 コックのフセインを残し、ポーターを帰す
 4日 高度順化とデポを兼ねて、フセインとともにビラフォンドラ5500mを往復
 5日 フセインをメールランナーとして帰し、二人で踏査を始める。
 ビラフォンド氷河5300mで幕営
 6日 ビラフォンドラを越え、ロロフォンド氷河に入る
ロロフォンド氷河5300m付近、12時前、右田がヒドンクレバスに転落
 救出できず。中川、クレバス横で泊る
 11日 BCに戻る
 13日 フセインがポーター1名とともに戻ってくる
 18日 スカルドに戻る
 20日 ピンディに戻る
 9月 6日 中川、日本帰国

事故前後の行動

8月4日

高度順化とデポの為、フセインとともにビラフォンドラをめざす。オベリスクを過ぎたあたり、右岸から中央部にかけてクレバス帯である。大きく右へトラバースして左岸沿いに登る。小さいクレバスを飛び越えながら行くと少し平坦になる。標高 5150mあたりから第二のクレバス帯が始まる。ここでアンザイレン。右へ左へとルートを変えながら進む。大きなクレバスも現れるがすべて口を開けている。標高 5250mを越えると再び平坦な地形となる。広大な雪と氷の原だ。足元が氷からザラメ雪に変わり、時には膝近くまでもぐって非常にあるき難い。斜面はしだいに角度を増し、ビラフォンド・ラに続いている。この付近よりヒドンクレバスが現れ、注意しながら歩く。長い斜面をひたすら登り、まだかまだかと思っていると、テラムカンリ、アプサラサスが眼前に浮かび上がってきた。あいにく山頂付近は雲の中で、その下にテラムシェール氷河が見える。ビラフォンド・ラはビラフォンド氷河よりにその頂部があり、ロロフォンド氷河へは緩い傾斜で純白の雪の原が広がっている。シアチェン氷河が望める位置までは少し時間がかかりそうなので、荷物をデポして B C に戻る。

8月5日

フセインの装備では、奥に向かうのは無理なので、10日後に戻ってくるように言って、メールランナーとして帰し、二人で踏査を始める。昨日と同じルートを取って、5300mの平坦地で幕営。



重荷を担いでロロフォンド氷河を下っていく右田卓。 彼の最後の姿

8月6日

ラまでは早朝で固く締まっており歩き良し。ラ着 7時15分。快晴で、アプサラサス、テラムカンリが眩いばかりに輝いている。デポを回収してロロフォンド氷河の方へ下りて行く。荷物は一人 25kg 以

上ある。少し傾斜のある斜面をヒールキックで下降するとロロフォンド氷河の本流に出る。ロロフォンド氷河は氷とザラメ雪の部分とで斑模様である。ここまでクレバスなし。その後平坦な地形となり、所々クレバスが現れる。まん中からやや左寄りを行く。雪の部分でクレバスがありそうな所はピッケルでチェックしながら進む。しかし大きなヒドンクレバスは見受けられなかった。標高 5 3 0 0 m付近のザラメ雪の部分を歩行中、時刻 1 1 時 4 0 分頃、トップ右田がヒドンクレバスを踏みぬき墜落。中川、肩がらみのコンティニアスで確保を行うもなかなか止まらず。1 8 m程墜落して停止。ピッケルを打ち込みザイルを固定した後、右田の落下したクレバスに近づき中を見るが右田の姿見えず。声をかけると、『ザックと共に挟まつていて動けない。ザックの紐を切るのでナイフを送ってくれ』という返事があり、もう一本のザイルでナイフを下す。しかし右田、自分では切れず、1 2 時過ぎ、中川下降開始。クレバス上部は幅 1 ~ 1 . 5 m、途中で少し湾曲しており、右田は幅 5 0 c m 程の狭いところで、ザックの上に体が横になって挟まっていた。ナイフで背負い紐と右手のピッケルバンドを切り、ゼルプストを引っ張ってザックの上に立たせる。ブルージックを作つて、これで登つていけと励ますも、右田の意識少し変調をきたしており、自力で登れず。クレバス内は非常に寒く、上から絶え間なく水が落下し、全身ずぶ濡れ。中川もしだいに体の自由がきかなくなり、しかたなく右田を残し上にあがる。その後、呼びかけながら引っ張り上げようとしたが動かず。しだいに応答が弱くなり、1 6 時過ぎには反応がなくなつた。その日は、クレバス横で泊り、翌日、目印のデポ袋を残して、もと来たルートを一人で戻つた。



右田卓の転落したクレバス

反省点

クレバスはある部分が隠れても延長方向に開口部があれば、だいたい直線で走っているので見当はつく。またなんとなく筋のようなものが走っているのがわかる場合もある。しかし今回の事故の場所のように、あたり一面真っ白な雪原の場合、その存在はまったくと言ってよいほどわからないものであった。よつて、氷河上では、目で確認できなくとも、常にクレバスの存在を念頭に入れて歩行しなければならない。かといって、一歩ずつピッケルを突きさしたりしながら歩いていては、時間がかかってしかたがない。事故の後、一人でピラフォンド・ラを越えて B C に戻る時は、一歩足をだすたびにピッケルを何回も突き刺していたので、2 日で来たところを 5 日かかった。よつて常にザイルでつながつた相手が、いつ落下しても止められる意識と態勢を取つて行動することが必要である。

今回氷河上では、当時紹介されていた肩がらみのコンティニアスをおこなつてはいた。しかし、これでは、重い荷物をかついで急に落下した時には、衝撃が強すぎてなかなか止められなかつた。氷河上では、できるだけロープを緩ませず、体で止めるのが

有効である。間隔調節の為の手元ループまたは弛みはできるだけ少なくする。

ピラフォンド氷河、ロロフォンド氷河に関しては、少し前の1975年、静岡大学テラムカソリ隊、1976年、東北大学シンギカソリ隊、大阪大学アプサラサス隊が通過しており、その報告書は読んでいたし、大阪大学隊の同期の宮本君から聞き取りをして行ったのだが、登山隊の通過時期が、行きはもっと早く、クレバスは厚い雪に覆われていたということであろうか、また、大部隊の登山隊と少人数の隊の感覚の違いもあるだろうか、あのあたりのヒドンクレバスに対する注意は聞かれなかった。翌年、遺体回収に再び現地に行った時は、8月の下旬であったので、右田の落ちたクレバスは大きく口を開けており、つながったままのザイルは、その底から氷の中に消えていた。結局、遺体回収はできずに帰国した。氷河は年により、時期により、常に変化しており、先入感は通用しない。

また、氷河上を二人で行動して、一人がクレバスに転落した場合、落ちた方に行動能力がないと、一人で引き上げるのはほぼ不可能。二人でもきついかもしれない。下の方まで落ちてしまうと、今回のように、最初、右田の意識はまだしっかりしていたが、氷河上から融水が滝のように落下しているので、すぐに低体温症になって、意識もおかしくなり、体も動かなくなる。よって、もし落下した場合でも、最低限の範囲で止めなければ、重大事態になる。

クレバスに関しては、氷河を経験していても、落ちずに行動できるという自信はない。誰かが通ったから大丈夫ということはなく。現に、翌年遺体回収に行った時は、ポーターを入れて5人で行動していたが、3人目がクレバスを踏み抜いた。この時は止められたので重大事態にはいたらなかった。

以上、30年以上前のことですが、今後の参考になればと思います。

また、詳しい報告は山と人13号、および山と人80年に載っていますので、ご参照ください。

なお、シアチエン氷河の一帯は現在、インドの実効支配となっており、軍事上重要地帯であり、パキスタン側からもインド側からも入れないとと思われます。リモに関しては、その後、インド側から、日本ヒマラヤ協会およびインドの合同隊により初登頂がなされました。